

インド

―古本でも本は本―

坂井華奈子

●はじめに

筆者は現在インドの政府刊行物の流通と図書館を対象に調査を行っているが、政府刊行物のなかには非売品も多い。版元の省庁を訪問すると在庫があれば寄贈してもらえるが、元が無料なため海外に送付してもらうなどの便宜を図ってもらうことは難しい。従来、図書館でこうした資料を入手するにはお互いの機関の出版物を送付し合う「資料交換」が有効な手段として機能していた。しかしインターネットが普及し手軽に情報を公開できるようになると、印刷、製本や送付のコストを削減する機関が増え、交換機関は徐々に減少しつつある。しかし、インドの場合ウェブの更新が滞ったり、リンクが途切れていてファイルにアクセスできなくなったりと問題が多く、まだ冊子体の重要性も高い。交換

で入手できない資料やバックナンバーの欠号などは、古書を扱う書店・代理店を通して購入することもあるが、一般の本と違って入手先は限られる。イギリスに出張した際に現地の図書館で資料入手ルートについて情報交換をしたところ、インドについては同じ書店と取引をしていることがわかり、世界と入手ルートの狭さを実感した。デリーから車で一時間ほどのその店舗を訪ね、店主に非売品の政府刊行物の流通事情について話を聞いたところ、昔は選挙で負けた議員がオフィスを引き払うときや、役人、旧計画委員会などが資料を廃棄する際に古書市場に出回っていたが、最近では直接裁断に回されることも多くさらに入手が困難になっているとのことだった。もちろん、このような特殊な資料を扱う古書店ばかりではなく、

インドの古書市場では教科書類、英語のベストセラー小説やレシピ本、コピーテーブルブックと呼ばれる大型のアート本や写真集などがよく売られている。新刊のみを扱う書店もあるが、古本屋との明確なすみわけがなく、古本と新刊を一緒に扱っている書店もみかける。また、路上に本を並べたり、信号待ち中の車の窓から窓へと手持ちで売り歩くような販売方法もある。本稿ではそのような多様な本の流通経路のなかからオンライン通販、街角の書店と日曜に開かれる古本市を中心にインドの古本事情の一端を紹介してみたい。

●オンライン通販

インドは多くのIT技術者を輩出している国だけありeコマースも盛んでオンラインでもたくさん本が売り買いされている。新刊

も含め書籍をメインに扱うサイト以外に個人が登録して車から携帯電話まで様々なものを中古で売り買いできるウェブサイトにも古本のカテゴリが設けられている。ただし、通販には古本に限らず現物が確認できないという欠点がある。古本の場合写真では書き込みの有無など本のなかの様子を確認するのは難しい。個人的には利用したことはないが、同じ書籍が複数売りに出ている安い方を買ってみたところ印刷が薄くて読めなかったという話も聞いた。おそらくこれは中古というよりもコピーによる質の悪い海賊版ではないかと思われる。道端でペーパーバックを立ち読みしていても古本に混じってコピー汚れが目につくものが散見される。精巧に複製されており外見ではよくわからないが、中身をめくると違和感を覚えることがある。たとえば通常英語の書籍では標題紙裏に日本の奥付にあたる出版事項が記載されているが、それが表ページに来ていたりする（枚数節約のために白いページを飛ばしてコピーしたのだらう）。もっとも、インドで出版されている書籍の場合、新刊本でも印刷がずれていたたり乱丁や落丁も多いので印



本の量り売り。辞書類は 1Kg200 ルピーなので 1.5Kg で 300 ルピー（筆者撮影）

刷状態の良し悪しで海賊版かどうかを見分けるのは難しいといえる。ウェブで古本について検索すると巷にあふれる通販サイトのなかで、どこからのもっとも安く快適に本が買えるかという口コミ情報に行き当たる。通販で納得のいく買い物をするのは難しいのかもしれない。

●街角の書店・本を売る露店

筆者の赴任している研究所はデリー大学のキャンパス内にあり、周辺には学生向けの本を扱う書店が多くみられる。看板にはカレッジ・ブックス、教科書、新刊・中古、売り・買い、などの文句が書かれていて新刊も古本も一緒くたに扱われている。たいていそういう書店は間口が狭く、店内にはぎっしりと本が収納されていて、自分で棚からとるよりもカウンター

で店主にどのような本がほしいかを伝えて出してきたらうような形が多い。デリーではジャワハルラール・ネルー大学の近くにも同様に教科書などの古本を扱う店が集中しているようだ。大学生は古書市場の主要な顧客なのだろう。

店舗を構えた書店以外にもマーケットの路上に本を並べている様子もよくみかける。路上ではベストセラー小説などの娯楽的な本が多い傾向がある。午前中にはバイクで本を運んできて並べている様子を見ることがあるが、早い者勝ちなのか曜日ごとなのか、毎日同じ場所に店が出ているわけではなく、洋服や鞆など別の露店が出ていることもある。

●ダリヤガンジの日曜古本市

毎週日曜日にオールド・デリーのダリヤガンジではマーケットの軒先で古本市が開かれる。一九六四年から毎週開かれているそうだ。

ダリヤガンジにはアンサリ・ロードと呼ばれる書店や出版社が集まる通りや、教科書などを売る書店が立ち並ぶナイ・サラクという通りもあるが、古本市はデリー門の辺りからアサフ・アリ・ロー

ドとネタジー・スバース・ロードにかけて二キロ近く続いていた。ただでさえ混雑しているオールド・デリーの雑踏のなか、歩道が本で埋まり、すれ違うのも難しい。財布や携帯電話などを盗まれないようにと注意する声も聞かれた。

埃っぽい路上に、所狭しと何百もの本が表紙を出して並べられていたり、壁のように高く積み上げられていたり、または乱雑に積まれた本の山を掻き分けて掘り出し物を文字どおり掘り出さねばならなかったりと売り方も色々である。日焼けして傷んだものや、びっしりと蛍光ペンで線が引いてあるようなもの、ビニールに包まれたわりときれいなものなど、状態も値段も様々である。どれでも二〇ルピーなどと明示してある場合も多い。小説一キロ一〇〇ルピーなどと量り売りをしていたのには驚いた。インドで暮らしている野菜や貴金属の量り売りには慣れていたが、本までも中身より重さで値段が決まるとは大胆である。熱心に値切り交渉をしながらテキストを買う学生の姿が多くみられた。一九九二年発行のぼろぼろな日本語のガイドブックをみつけ参考ま

でに値段を聞いてみたが、法外な値段をふっかけられて憤慨した。三時間ほどかけ、量り売りのヒンディー語辞書、インド神話をもとにした英語の小説、インド風ドレスやジュエリーの写真が満載のブライダル雑誌などを安く手に入れ、古本市をあとにした。

●おわりに

値切るのが苦手な筆者と一緒に買い物をしたインド人に「値切らないと買い物をしたとはいえない」といわれたことがある。古本市場を巡ってみて、値段交渉のかけひきを含めて買い物を楽しむインド人にとっては、いかに安く買ったかという値段と、古本が新刊にかかわらず本の内容が重要なのではないかと感じた。また、学生にとって高価な学術書をどう入手するかというのは日本でもインドでも共通の悩みである。熱心にテキストを値切るインド人学生をみて、新学期に教科書を求めて大学の周りの古書店をはしごした自分の学生時代が思い出された。

（さかい かなこ／アジア経済研究所 前デリー海外派遣員）